

緑色

2024. 5. 21

山が緑だった。いつもは、山は青い。この日の山は、朝方の雨が上がり、見事な緑色に染まっていた。いつもだと遠くに感じられる山が、眼前に迫ってきている。こんなふうに緑色になる山を見ることができる日は、そう多くはない。

山が緑になると、平地の新緑の緑と一体となる。そして、盆地が見事な緑に包まれる。改めて、自分が生きている場所が、盆地だと認識させられる。決して窮屈な感じはしない。かといって開放感があるわけでもない。昔から見慣れているためだろうか。これが当たり前になっている。

この前、久しぶりに宇都宮に行ってきた。福島は、四方どちらを見渡しても山である。宇都宮はというと、三方は平地である。一方だけが山であり、その山が際だつ。中でも、一番存在感があるのは、男体山である。福島とは、見える空の面積が違う。

さらに南下すると、四方ともに山がなくなる。関東平野である。いつも思うのだが、自分の視界、見える景色に山がないと、どうも落ち着かない。妙な感じがする。空が開放的なのだが、何かに抱かれているという安心感がない。

人というのは、住めば都で、慣れとともに、その土地に愛着も生まれてくるものだろう。山育ち、平地育ち、海育ちと、生まれ育った場所が、その人に何らかの影響を与えているように思う。環境が人をつくる。土地柄も大きいように思う。

吾妻連峰が緑色に映えるときには、晴れている。空気も澄んでいる。ここに、虹がかかれば言うことはない。そんなチャンスがあれば、ぜひ写真におさめたい。山が近いと、多少の圧迫感はあるが、5月の清々しさを感じることができる。実に、いい季節である。

いつの間にか、風薫る5月も下旬になってきた。新生活をスタートさせた人たちは、慣れとともに、少しずつ疲れがたまってきた頃かもしれない。朝のさわやかな空気を思いっきり吸い込んで、一日一日を充実したものにしてほしい。福島の空気はおいしいはずである。

毎日、山を見ながら出勤している。山が同じ姿を見せることはない。毎朝、見ていても飽きることはない。そのうち、変化にも気づくようになる。季節の移ろいも感じさせてくれる。あっという間に、雪うさぎは、その役目を終え、消え去った。そのタイミングに合わせるかのように、田んぼには一面、水が張られた。かわいらしい苗の登場である。その生長も楽しみである。

自然というと緑のイメージがある。人にとって、緑が身近にあることは、それこそ自然なことなのかもしれない。五月晴れのさわやかな朝に、そんなことを思った。